

編集後記

今年の5月19日から21日のわずか3日間に、佐渡・長谷寺(ちょうこくじ)で国の重要文化財指定の十一面観音像が、33年に1回のご開帳があることを知った。次回のご開帳は2034年となり、このような機会は滅多にない、その頃は生きていられるかどうかかわからないなどと家内と話し、20日の日曜日に新潟より日帰りで訪れてみることにした。この長谷寺は807年(大同2年)に弘法大師が開いたという真言宗の古刹である。周囲の地形や伽藍のレイアウトなどが奈良の真言宗豊山派本山の長谷寺(はせでら)に良く似ていることから、「里を長谷と称し、山号を豊山、寺号を自性院長谷寺と称せり。」と佐渡記に記されているという。参道に牡丹が咲き乱れるところも良く似ていると言われている。境内に入るところには樹齢800年以上の三本杉があり、深い緑の木立に囲まれ苔むした石段の参道の両側には、時期が少し遅れていたとはいえ色とりどりの牡丹が咲き誇っていた。牡丹のほのかな良い香りを吸い込みながらこの石段を昇ると、そこに本尊を安置している長谷寺があった。さすが33年に1回だけの本尊のご開帳とあって、多くの見学者が列をつくって並んでいた。最後尾に並んで待つこと約30分、ようやくご本尊を拝顔することができた。ご本尊は50~60cm位の高さのものであり、薄暗い所に安置されているので十分には観察できなかったが、33年前、66年前あるいは99年前にはどのような人達が拝顔したのかといろいろ想像しながら、ご尊顔に手を合わせ祈った。33年に1回という貴重な体験でもあり、何かほのぼのとした満足感に浸ることができた。

この長谷寺から車で約5分くらいの所に、NHKの大河ドラマ「北条時宗」にも出てくる日蓮が1271年に流され、最初の日々を過ごした所に建てられている根本寺がある。日蓮宗10大聖地の一つになっており、当時日蓮が「開目抄」を著わしたといわれる茅葺きの三昧堂が再建されており、往事の面影を偲ぶことができた。

忙中閑ありの1日を歴史探訪で過ごしたが、このような経験も時には良いものであると自己満足しているのは、年のせいであろうか。

(畠山勝義)